



第十九回

子どもたちの心を知る

文 | toshi
イラスト | 秋野 純子



私はかつての自分のクラスで起こったことをなつかしく思い出すのです。

当時、私は転勤したばかりで、五年生を受け持っていました。毎年なわとび集会が行われることや、そのときに記録をとって、学年ごとに一位のクラスを表彰することはよく承知していました。

しかし、休み時間などになわとびに真剣に励む他のクラスをしり目に、わがクラスの子どもたちは一向にその気配を示さず、いつも通りの生活を送っていました。後でわかったのですが、他のクラスは皆、担任がはっぱをかけていたようです。そうしたことが当たり前だと思っていたわがクラスの子どもたちは、私が声をかけるのを待っていたのでした。

なわとび集会が一週間後に迫ったころ、一部の子どもたちが慌てだしました。

「先生。なわとびの練習、しなくていいの」

「他のクラスはすごく練習しているよ。このままじゃ、びりになっちゃうよ」
「先生がいけないんだよ。何にも言わないから、練習しないままになっちゃったじゃん」

あら、あら。子どもたちは、練習をしないことを私のせいにしてしまいました。

子どもたちの心を見つめ、意欲的に学ぶ態度を養うことは、とても大切です。そこで、本記事ではその観点から、かつての私の事例を取り上げ、考察してみました。

この事例には反省点もあり、全てがうまくいったといえるわけではありませんが、意欲的に学ぶことがいかに子どもたちの成長を促すか、そんな典型を示していると思います。

○なわとび集会の思い出

全校で「なわとび集会」を行う学校は多いのではないのでしょうか。集会が近づくと、休み時間などに学級ごとで長なわに興じる姿が見られます。子どもたちは目標の回数に迫って喜んだり、うまくいかずトラブルになったりして、悲喜こもごもです。それを見ながら、

子どもと動き回れる。子どもと感覚がびったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

< toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のブログ」を執筆中。

その声を受けて学級で話し合いの場を設けると、子どもたちの「今からでも練習したい。しないといけない」という思いには強いものがあるとわかりました。それから数日練習に励んだのですが、時既に遅し。びりになることは否めないようでした。

ところが……、そう、ところがです。なわとび集会の当日は雨で、開催は半月後に延期になってしまいました。そのことが、わがクラスに幸運を呼んだのです。全員が朝、中休み、昼、放課後と、なわとびの練習に励むようになりました。

それでも私は、「すごい。そんなに記録が伸びたのか」という言葉をかけただけでした。

そして半月後、何と、わがクラスは断然一位となり、表彰されたのです。私は子どもたちのまとまり、がんばる意欲をほめながらも、

「延期にならなかつたらびりだったのにね」と、からかったものでした。

○この事例でわかることは

事例の紹介はここまでです。考察に移りましょう。この事例の意味するところは、何でしょうか。「わずか半月でびりから一位へ」。これは何がもたらしたのでしょうか。

たのでしよう。私は指導らしい指導をしていないのです。

子どもたちを支えたのは、「やらなければいけない」という切実な思いでしょう。

他のクラスの中には、トラブルが絶えないところもありました。そこでは、なわとびの苦手な子どもが参加しようとしなかったり、とべる子どもがとべない子どもをバカにしたりする姿が見られました。

わがクラスにも、もちろんなわとびの苦手な子どもはいました。ですが、そうした子どもも、練習には一丸となって参加したのです。苦手な子どもはとぶ列の後方に並び、順番が来たら、なわをもつ子どもがゆっくり回してあげるように工夫する姿も見られました。毎年の行事とはいえ、子どもたちはこうした工夫を自然発生的に行っていました。

また、苦手な子どもをみんなで励ます光景も見られました。時にはトラブルになりそうなこともありましたが、「そんなことをしていたら、とぶ回数が増えちゃうよ」

と、多くの子どもから声がかかったため、大事に至らずに済みました。

「何としてもやらなくて」という子どもたちの切実感や切迫感が、こうした効果をもたらしたのです。

なわとび集会の後、子どもたちは「やればできる」と自信を深め、学級がさらにまとまり、人間関係が濃密になったことはいうまでもありません。

さて、それでは反省点はなかったのでしょうか。そうではありませんね。なわとび集会が予定通り行われていたらびりだったのですから、万々歳というわけにはいかないでしょう。

自身の反省点は、子どもたちをよく見ているようでいて、実は表面的なところしか見ていなかったことです。

私は子どもたちが「練習をやるう」と言わず、ふだん通り生活しているのしか見ていませんでした。せめて、「練習しないの」と私に訴えてきた子どもには話しかけて、子どもたちの内にある思いを知るよう努めるべきだったと思います。

教師の、子どもたちの心を知ろうとする努力は、永遠なのでしょう。

